

論文

日本語の相づちの頻度とタイミングに関する総合的考察

羅希

要旨：

本稿では日本語の相づちがどのように先行発話に影響されるかについて考察した。実験1と実験2では、相づちの打たれる頻度が会話する相手の発話速度に大きく影響するということが分かった。実験の結果、相手発話の速度が極めて速い（9 モーラ/s 以上）場合、相づちが打たれにくくなり、相手発話の速度が極めて遅い（4 モーラ/s 前後）場合でも、発話が長く続けば、相づちが打たれにくいことが明らかになった。前者は実際の会話データにおいても確かめられた。また、実験3と実験4において相手の先行発話に対する理解度や態度が異なれば、相づちの打たれるタイミングも変化するということが示された。相手の先行発話に対して「不理解」の場合、相づちは、「中立（理解したが、特に賛否の態度がない）」と「理解し、賛成」の状況に比べて遅れて（相手発話の終了後から 350ms 以降に）発せられる。被験者によっては、相手発話に対して「理解したが不賛成」の状況における相づちもこのような傾向が見られたが、非常に速い段階で相づちを打つ被験者もいる。つまり、相手発話に対して「理解したが不賛成」の場合、相づちの打たれるタイミングには、大きな個人差があるということが明らかになった。

また、実際の会話データの観察の結果、遅延した相づちは会話において主に「新規話題の導入部」、「相手の発話が一つの見解として完結した部分」という二つの箇所に見られることを見出した。前者の箇所での相づちの遅延は「不理解」、後者の箇所での相づちの遅延は「理解したが不賛成」

に結び付けられると推測できる。

キーワード：相づち、日本語、頻度、タイミング

A General Study of the Frequency and Timing of Backchannels in Japanese

Abstract：

In this essay we investigated Japanese backchannels in relation with precedent utterances. Through the experiments we conducted it was shown that the frequency of backchannels varies in accordance with the speed of the previous utterance made by the interlocutor. Utterances with rapid speed (faster than about 9 morae/s) are not apt to be accompanied by backchannels. It was also shown that comprehension and attitude toward the previous utterance affect the timing of backchannels. A speaker who does not comprehend the previous utterance well tends to hit her/his backchannel later than a speaker with full comprehension (but without any particular attitude of agreement/disagreement). A similar delay in hitting backchannels is observed for some speakers with an attitude of disagreement, but the timing of backchannels for disagreement depends largely on the individual. Some speakers even hit backchannels for disagreement faster than in other cases.

Keywords：Backchannels, Japanese, Frequency, timing

1. はじめに

相づちの研究は、英語会話中の *yes*、*uh huh*、*fine*、*I see* などの短い発話に関する Fries (1952) の “single short utterance” や Yngve (1970) の “backchannel” にまで遡ることができ、日本でも 1980 年代から盛んに

なってきた。

これまでの多くの研究で指摘されてきたように、現代日本語共通語（以下「日本語」）の相づちは他の言語に比べて会話中に頻繁に発せられる傾向があり（Clancy 他 1996）、一つの「思いやり」行動（メイナード 1993）と見なされている。この考えを単純に発展させれば、「高頻度で非単調な相づちは（少なくとも日本語において）良いコミュニケーションにつながる」ということになる。実際、こうした考えのもとで、日本語学習者が相づちを打つ頻度が日本語レベルを測る尺度の一つとされたこともある（楊 1997、佐々木 2002 など）。

しかし、日本語学習者が来日して相づちが高頻度になり、形式のバラエティが豊かになったからといって、それでコミュニケーションの雰囲気が良くなるわけでは必ずしもない（羅 2014a, 2014b）。相づちが高頻度で非単調に打たれることと、会話の雰囲気が良いことは同一視できるようなものではない。

従来の相づち研究は、「そもそも相づちとは、相手とのコミュニケーションの中で、インタラクティブな状況に埋め込まれた形で発せられるものだ」という認識が、十分透徹されているようであり、実は必ずしもそうではなかったのではないか。というのは第一に、「相づちが相手の先行発話（速度、内容に対する理解度や態度）にどのように影響されるか」という問題が追求されていないからである。また第二には、「相づちが相手の後続発話にどのように影響を与えるか」という問題も、僅かな研究（中里 2002）を除けば取り組まれていないからである。

本稿では筆者らの先行研究を発展させることによって、上記の第一の問題の解決をはかろうとするものである。従って、本稿は①相づちの頻度・タイミングと相手発話の速度との関係、②相づちのタイミングと相手発話に対する理解度・態度との関係の解明を目的としている。以下、第2節では相手発話の速度、第3節では相手発話の内容に対する理解度や態度に関して実験とその結果を示す。さらに第4節では実験を通して得られた知見を、現実の自然会話における発話と対応づける。第5節はまとめである。

2. 相づちの頻度と相手発話の速度に関する実験

現在のところ、相づちの頻度と相手発話の速度に関する研究はほとんど見当たらない。中里（2002）では、聞き手が意図的に（不自然ではない程度に）早く相づちを打つ際に、話し手の後続発話の発話速度に増加傾向が見られることが示されたが、その逆、話し手の発話速度が如何に相づちに影響するかに関しては未だに不明である。本節では相手の発話速度がどのように相づちの頻度に影響を与えるかについて、二つの実験とその結果を示す。

相づちの出現環境に関して、メイナード（1993）は PPU の末尾付近で相づちが打たれやすいと指摘している。PPU とは、ポーズによって区切られる語句のことを指しており、「その確認は客観的になされ得るので、分割の基準として使う際信頼できるものと思える」（メイナード 1993: 96）と述べられている。このように、メイナードは相づちの出現環境について傾向を述べるにとどまり、相づちの頻度には言及していないが、発話速度が遅いほど、単位時間内の PPU の数は多くなりがちではないか。たとえば早口に「それで田中さんと山田さんが相談して一緒にお金を出すことになって、」と言う場合と、ゆっくり「それで、田中さんと、山田さんが、相談して、一緒に、お金を、出すことに、なって、」と発音する場合を比べると、PPU の個数は後者の方が遙かに多い。以上を単純に推測すると、発話の速度が遅いほど、その発話に対する相づちの量は増える傾向があるのではないかとも思われる。だが、これは本当に正しいのだろうか。また逆に、相手発話が非常に速い場合、相づちを打つことがためらわれ、頻度が低くなる可能性があると思われるが、これはこれまで言及・検証されていない。

そこで筆者らは、相手発話の速度が非常に速い場合と非常に遅い場合について、相づちの打たれやすさを調べる実験を行った。以下、この実験を実験 1 とする。

実験 1 では、同じ内容¹で異なる速度の三つの発話を被験者に聞かせ、それぞれの発話期間中に相づちが打たれる可能性・必要性があるかどうかを判断させた。三つの発話（音源 1～3）の呈示順序はランダムとした。

最初の教示は「この発話に対して相づちを打てば、発話のペースを乱し、邪魔になるでしょうか」とし、作成した音声刺激を被験者に一度聞かせた。このように、その発話の継続時間内で相づちの出現が可能かどうかを判断してもらった。被験者が「邪魔になる」という判断をすればそのまま次の刺激を聞かせるが、被験者が「邪魔にならない」と回答すれば再度発話の音声を流して、それと同時に図1のような発話内容のローマ字（音声分析ソフト wavesurfer-1.8.8p4-win-i386 を用いて作成したもの）を被験者に呈示して、被験者に「相づちが打たれる時点」を選択させた（複数選択可能）。

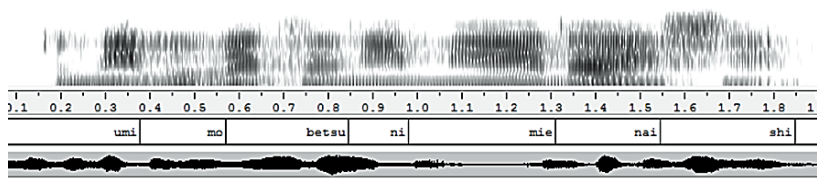


図1：被験者に呈示した視覚刺激



音源1「普通」の発話



音源2「早口」の発話



音源3「非常に遅い」の発話

被験者は20代から30代の日本語母語話者計20人である。実験の結果を図2に示す。図2の縦軸は、被験者が答えた、各発話における相づちの挿入可能箇所の総数である。

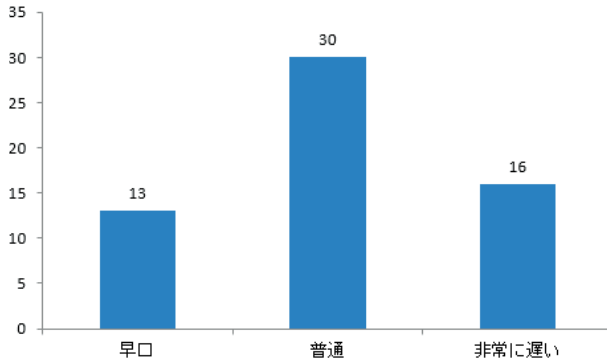


図2：実験1の結果

実験1の結果は、発話速度が「普通」の場合（平均発話速度²が7.4モーラ/sの場合）相づちが最も打たれやすく、相手発話速度が非常に早い場合（9.9モーラ/s）も、非常に遅い場合（4.2モーラ/s）も相づちは打たれにくいというものであった。

しかし、この実験には問題がないわけではない。なぜかという、実験1で使用した刺激は、複数の節を含む「文」であり、「文内のポーズの長さをどう設定するか」という問題が避けられないからである。

実験1を行った際、筆者らはポーズの長さという変数をコントロールするため、各々のポーズの長さを一律に発話長全体の9%に調整していた。しかし、それでも実験の結果がポーズの長さに影響されていた可能性がある。なぜかという、ポーズの長さが発話長全体の9%以外である場合にも実験1と同様の結果になるという保証はないからである。より精確な結果を得るために改めて実験を行った。以下、この実験を実験2とする。

実験2で使用した刺激は、実験1で使用した発話を改善したものである。実験2では、発話刺激を複数の節を含む文ではなく、途中にポーズの無い単一の節とした。より具体的には、実験1で使用した「海も別に見えないし、住宅街やし、学生もいっぱい通るしね」という文の中から文頭の節「海も別に見えないし」を選び、発話刺激とした。その上で、この節を「早口」「普通」「非常に遅い」という三つの速度で発した発話刺激を用意

した（音源4～6）。発話の速度は、「早口」が8.9モーラ/s³、「普通」が6.5モーラ/s、「非常に遅い」が3.9モーラ/sであり、発話者は実験1の発話者と同じである。被験者は20代から30代の日本語母語話者計20人であり、実験1の被験者とは重なっていない。



音源4「普通」の発話



音源5「早口」の発話



音源6「非常に遅い」の発話

実験2では、異なる速度の発話に対して相づちを打つことの当否を被験者に判断させた。教示は「この発話に対して相づちの「うん」あるいは「はい」を打つと、後続発話のペースを乱し、邪魔になるかどうか判断してください」とし、作成した音声刺激を被験者に二度聞かせた。

次の図3は実験2の結果を示したものである。縦棒グラフは三つの速度の発話において、被験者が判断した「相づちの挿入可能箇所の総数」を示している。

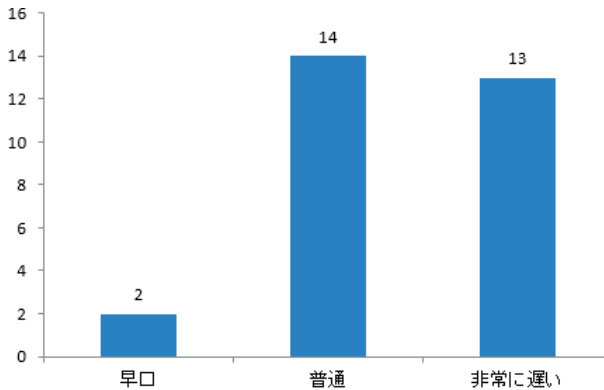


図3：実験2の結果

この図を見ると、実験1の結果と同様に、「早口」の速度において相づ

ちが打たれる可能性が最も低いことが分かった。それに対して、「普通」と「非常に遅い」の場合では、実験1と異なる傾向が見られた。実験1では「非常に遅い」の場合において挿入可能の相づちの個数は、「普通」の場合のおよそ半分ではなかったが（カイ二乗検定で分析した結果、 $\chi^2(1) = 6.021$, $p < .05$ ）、実験2では有意な差が出なかった（カイ二乗検定で分析した結果、 $p > .05$ ）。

実験2で「普通」と「非常に遅い」の間に差が見られなかったことは、実験1との大きな違いである。この結果は、阪田・広瀬（1995）の調査に関わると考えられる。阪田・広瀬の調査によると、会話する際の発話速度は文頭ではやや遅く、文中（文の1/3あたり）になると速くなる傾向がある。つまり、普通の会話において文頭の発話は文中より速度が遅くてもおかしいことではない。このことからすれば、「非常に遅い速度」の発話は、長く（一節以上）続く場合は相づちが打たれにくい、文頭だけなら遅さが際立たず、相づちは打たれやすいと考えられる。

実験2の結果から、ポーズという変数を抜いた場合でも、実験1と変わらず「早口」の速度の発話に相づちを打ちにくいことが明らかになった。

3. 相手発話に対する理解度や態度に関する実験

これまでの対照研究の結果を見ると、日本語母語話者は中国語母語話者や韓国語母語話者とは異なり、相手の意見にさほど賛成ではない場合でも頻繁に相づちを打つ傾向がある（李 2001、Endo 2010）。しかし、相手の意見に賛成していない際の相づちは、賛成する際と必ずしも同じタイミングで発せられてはいない。Pomerantz（1984）は、相手の先行発話に非選好的反応をする際に、その反応が遅延する傾向があると述べている。これが実際の日本語会話に当てはまるものなのかどうかを実験で調べた。以下この実験を実験3とする。

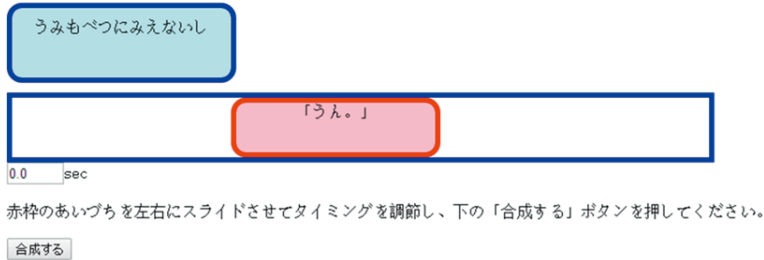


図4：実験3の被験者に呈示された、相づちのタイミング調節画面

(<http://www.speech-data.jp/timing/>)

図4は実験3で被験者に呈示したパソコンの画面である。図4で示しているように、画面には青色発話（普通の発話）と赤色発話（相づち）がある。青色発話の部分は固定されているが、赤色発話の部分はドラッグ操作で自由に移動させることができ、したがって青色発話とのタイミングが自由に調節できる。移動させた赤色発話は、左下の「合成する」ボタンを押すことによって試聴・確認ができる。最適と思われるタイミングができるまで被験者は調節を何度繰り返しても構わない。

課題としては、青色発話に対する理解度・態度に関して四つの状況（図5に沿ったもの）を設定し、発せられる赤色発話（相づち）のタイミングを被験者に調節してもらった。

- ①青色発話が理解でき、さらにそれに賛成する状況（以下、「賛成」と呼ぶ）
- ②青色発話が良く理解できたがそれに賛成・反対するきもちは特に沸かない状況（以下、「中立」と呼ぶ）
- ③青色発話が理解できたが、あまり賛成できない状況（以下、「不賛成」と呼ぶ）
- ④青色発話が理解できなかった状況（以下、「不理解」と呼ぶ）

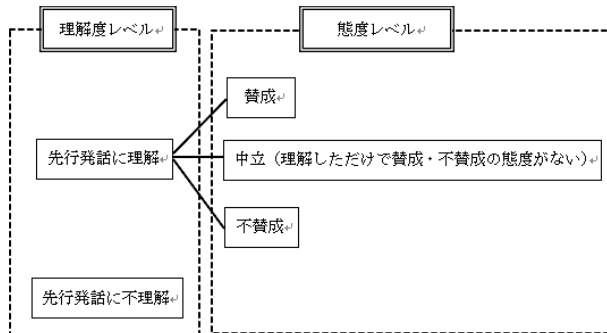


図5：先行発話に対する理解度・態度の階層

被験者にはこのような調節を、図6に挙げる七つの異なる発話ペアに対して行わせた。被験者は20代から30代の日本語母語話者16人である。

TEST01	「うみもべつにみえないし」「うん」
TEST02	「なんかねびょうぶみたいなので」「うん」
TEST03	「とくにねやすみのひってね」「うん」
TEST04	「なつやすみにきたときにね」「うん」
TEST05	「すごいよこうこうぐらいからかみそめたりとか」「うん」
TEST06	「わたしびびあんすうすきなんですよ」「うん」
TEST06	「おねえちゃんいまいちやったみたいやけど」「うん」

図6：実験の発話ペア

実験の結果を分析する際に、「賛成」と「中立」の状況では、正の数値（相手発話と重ならない）も負の数値（相手発話と重なる）もある。t検定や分散分析を行う際には、負の数値を回避すべきである。従って、本稿ではデータを分析する際に相手発話の終了する前に発せられる相づちと終了後の相づちに分けて行った。相手発話と重ならない場合分散分析を行ったところ、「賛成」「不賛成」「不理解」の間、「中立」「不賛成」「不理解」の間に有意差が見られた ($p < .001$)。また、相手発話と重なる場合t検定を行ったところ、「賛成」と「中立」の間に有意差が見られた ($p < .001$)。

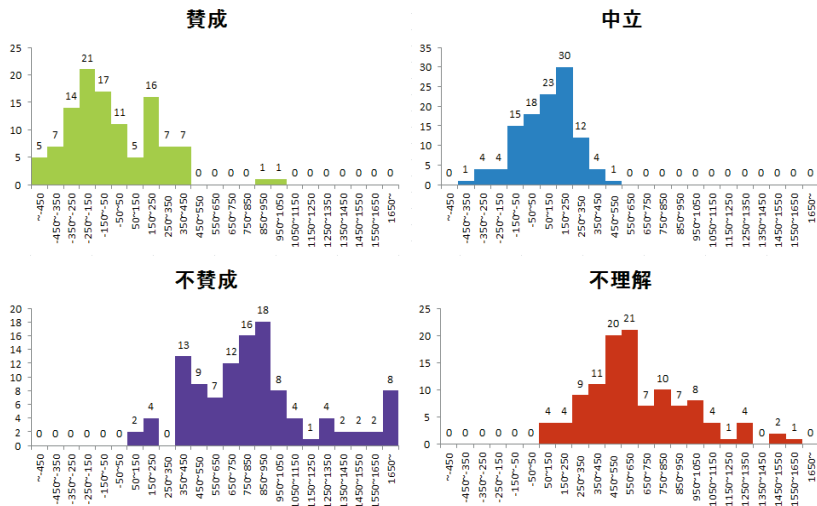


図7：実験3の結果

図7は各理解度・態度において相づちの打たれるタイミングを示している。横軸はタイミングの区間であり、縦軸はそれぞれのタイミングの区間内における相づちの分布数である。図7に示したように、相手発話の終了時から350ms以前に打たれる相づちは、相手発話に対して「中立」あるいは「賛成」の可能性が大きく、350ms以降に打たれる相づちは「不理解」か「不賛成」に結び付く可能性が大きいという結果が出た。より分かりやすくするために実験3の結果を図8にまとめた。

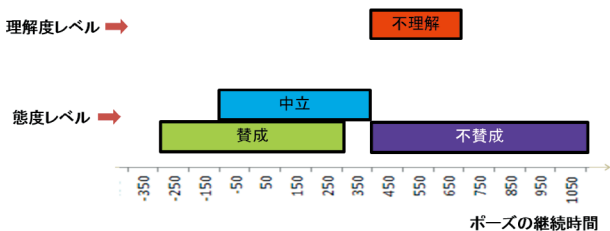


図8：実験3の結果のまとめ

しかし、この実験3の設計に関しては、問題がないとは言えない。まず、1人の被験者に四つの状況における相づちのタイミングを全て調節させるという設定において、タスクの負担が大きすぎる恐れがある。また、全ての被験者は「中立」→「不理解」→「賛成」→「不賛成」という順番で調節したため、順番を変えれば、実験結果も変わる可能性がある。これらの問題を踏まえ、新たな実験を行った。以下この実験を実験4とする。

実験4では、実験3と異なり、1人の被験者は四つの状況における相づちのタイミングを全て調節するのではなく、ランダムに選ばれた一つの状況におけるタイミングだけを調節する。

被験者は20代から30代の日本語母語話者計26人である。実験3と実験4の被験者は重なっていない。実験4の結果を図9と図10に示す。

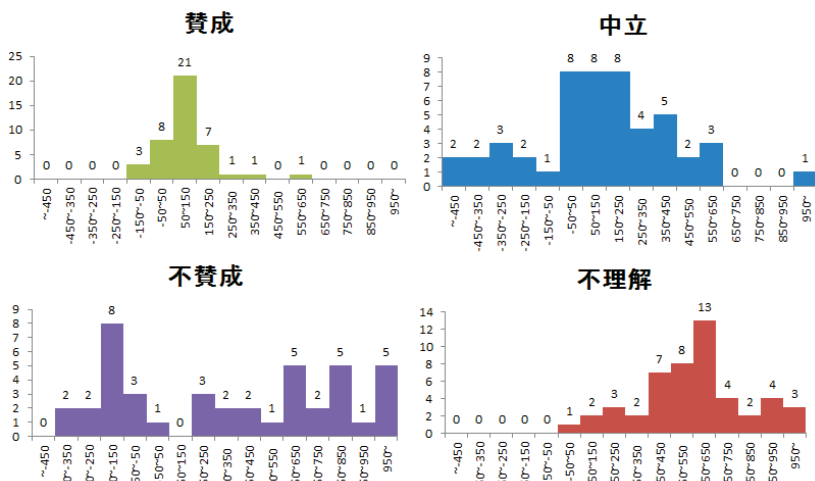


図9：実験4の結果

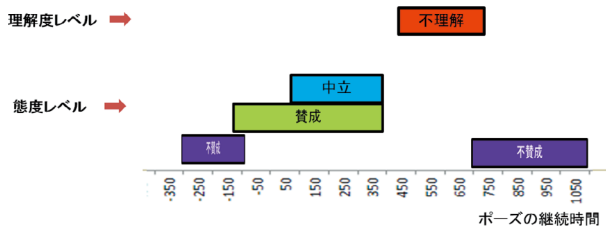


図 10：実験 4 の結果のまとめ

図 9、図 10 も図 7、図 8 と同様、各理解度・態度において相づちの打たれるタイミングを示している。横軸はタイミングの区間であり、縦軸はそれぞれのタイミングの区間内における相づちの分布数である。図 9 にあるように、「中立」「不理解」「賛成」の三つの状況における相づちのタイミングは、実験 3 とほぼ同じ傾向が見られた。それに対して、「不賛成」の状況における相づちのタイミングは、実験 3 と大きなずれが生じた。実験 3 において「不賛成」の状況における相づちのタイミングは、650ms から 1050ms という区間に調節されたことが多いが、実験 4 ではそうではなく、非常に早いタイミングか、非常に遅いタイミングかという分極化した傾向が見られた。相手発話に対する中立・賛成の相づちは早く打たれ（相手発話の終了時から 350ms 以前）、不理解の相づちは遅く打たれる（相手発話の終了時から 350ms 以降）と言えるが、不賛成の際の相づちは一定の傾向がなく、話者によって非常に早く打たれるか、遅く打たれるかのどちらになる。中立・不理解・賛成の相づちのタイミングはある程度共通するが、不賛成の際の相づちは個人ごとに異なる。つまり非選好的な反応をする際に、Pomerantz (1984) が述べているように遅れて相づちを打つ話者もいれば、相手発話が終わっていないうちに打つ話者もいる。前者は、相手の言っていることにあまり賛成できないので非否定的な応答詞「うん」を発するの抵抗感を覚えて遅延するのではないかと推測される。このように、相手の話に賛成しない際に、一部の人は相手のことを配慮しつつ反応するが、それに対して不賛成をストレートに表現する人もいる。

4. 実際の会話データの観察

以上の実験で得られた結果に対応するものは、現実の会話データにも見られるだろうか。以下、4.1では、ある人物が複数の人と会話する際に打った相づちの頻度が、相手発話の速度に影響されるかどうかを確かめる。4.2では有標的⁴である遅れて発せられた相づち（相手発話の終了後から350ms以降に打たれる相づち）を抽出し、どのような原因で相づちが遅延したのかを観察する。

4.1 発話速度と相づちの頻度

実験1と実験2の結果から、発話内容が同じであれば、「早口」の速度の発話に対して、相づちを打つことが非常に困難であることが分かった。そのことが実際の会話に反映されるかどうかを確認するために、同一話者が発話速度の非常に速い（平均9モーラ/s以上）話者と会話する際の相づちの頻度は、発話速度が普通の人と会話する際に比べて低くなるかどうかを検証した。20代の日本語母語話者の女性AとSを観察対象として、彼らと同じ年齢層、親密度の話者と会話する際の類似度の高い話題の断片を抽出して分析した。また、実験では、相づちの「うん」と「はい」の形式で実施したため、検証の際も「うん」と「はい」だけ取り扱うようにする。

相づちの頻度を算出する際には第2節で紹介したPPUという概念を使用した。本稿では「相づちの打たれる回数/PPUの個数」という方法で相づちの頻度を算出する。すなわち、相手発話の一つのPPUに対して相づちが何回打たれるかを調べる。

抽出した会話の断片1～4（音源7～10）の話題は、経験した出来事が述べられるという点で共通している（以下「/」はポーズを表す⁵）。

音源7 

断片1【会話の特訓】

- 1 H でたい(.) 大連の↓: /
 2 A うん
 3 H ん外国語学院で[いうと]こ(.)大学って[いうとこ]に行って↓: /
 4 A [うん] [うん]
 5 H なんか社会人向けの↓[: /
 6 A [うん]
 7 H 会話の特訓[ていうのが] あってんやん[か /
 8 A [おお] [はいはい]
 9 H それすごいお金使って[ね↑: /
 10 A [うん]
 11 H すごい使うのになんか知らんけど/[こ:]行くって言うてておか(.)
 12 A [うん]
 13 A う[ん]
 14 H [親にお /
 15 A [うん]
 16 H [お金もらって.

音源8 

断片2【猫】

- 1 S なんか/(.)そんなん最初分から[へんか]らさ: /
 2 A [うん]
 3 S .h ガタゴトって音するやんと外で /
 4 S で(.)いやなんかおる(.)と思って/(0.6)で/(0.9)いや隣もでも両隣
 もみんな/(0.2)今日は帰ってる[はず]やしと思って /
 5 A [うん]
 6 S ガタゴトってまた音すんねんやで/.h.h

- 7 S へ：どうしよ[うと]思ってもうすごいこ：身を固くして／.h
 8 A [うん]
 9 S 待ってるやんそしたらしばらく音せんくなるからな：↑／.h(0.4)
 なんやろうと思って／(.)ドア開けるやん. /ほしたら、/そのとき
 に猫は、/h ゴミ箱の中で↓：/色々作業[してはって]んな：/
 10 A [うん]

音源 9 

断片 3【書き取り】

- 1 K あ前に後ね↑：なんか、/○○○○の部屋に↓：/
 2 S うん
 3 K 行ったことがあってしばらく/
 4 S う[ん
 5 K [あの研究室でちょっとお留守番を/
 6 S うん[うん
 7 K [さして／(.)頂いてたことがあって/
 8 S うん
 9 K ○○○○もね↑：/意外となんかね↑：そういう言葉を書き取って/
 10 S うん
 11 K 書き取ったり自分で作った言葉をなんか紙に書いたりとかし[て/
 12 S [うんうん
 13 K 貼ってたりとか↓：/
 14 S うん
 15 K してましたね：/
 16 S う：：ん

音源 10 

断片 4【混雑時間】

- 1 A じゃ：↓／(.)あのわたしが／(.)す(.)スチューデントで入ろうと思ってるんですけど[夜七時] =
- 2 S [うん]
- 3 A =八時って言ったら：／どんなあの混んでますかって今よりもっと混んでますかって聞いてあ僕その時間ちょっと入ってないんでね：↓／(.)って言われて[ね↑：／
- 4 S [うん]
- 5 A んで：↓／
- 6 S @@@
- 7 A あそうですかって言って↓：／
- 8 S うん
- 9 A えっと何時かなじゃ朝(0.8)／
- 10 A 朝／(0.2)も混んでますかみたいな[こと聞いた]んですよ↓：[午前中(.)]って言ったら＝
- 11 S [うん] [うん]
- 12 A =あその時間はちょっと／(0.2)おじいちゃんおばあちゃん／(0.3)多いですね／
- 13 S あ

断片1～4における、相づちを打たれる相手の発話速度（モーラ/s）と相づちの頻度（回/PPU）を、次の表1にまとめる。

表1：断片1～4の相手の発話速度と相づちの頻度

断片	1	2	3	4
相づちの打ち手	A	A	S	S
相づちを打たれる相手	H	S	K	A
相手の発話速度（モーラ/s）	7.2	9.3	7.9	9.9
相づちの頻度（回/PPU）	1.3	0.3	0.7	0.4

表1から、AもSも、発話速度が9モーラ/sを越える「早口」の相手

(S・A) よりも、発話速度が7～8モーラ /sにおさまる「普通」の相手(H・K)との会話の方が、相づちを高頻度で打つということが分かった。これらの会話では、「早口」の相手発話に対しては相づちは打たれにくかったということである。

4.2 遅延した相づちに対する観察

実験3と実験4の結果に基づき、音声会話データベース Kobe Crest Flashの中から、遅延した（相手発話の終了後から350ms以降に打たれる）相づちを複数抽出し、観察した。これらの例を観察すると、遅延した相づちは会話において主に二つの場所に現れることを見出した。一つは、新規話題の導入部で、もう一つは相手の発話が一つの見解として完結した部分である。


4.2.1 新規話題の導入部に現れる遅延した相づち

新たな話題の開始部に現れる遅延した相づちの代表的な例として以下の二つ（断片5～6、音源11～12）を挙げる（「→」は会話において注目すべきところを示すものである）。

音源 11 

断片5【ドイツのマスタード】

- 1 O それでね(.)からしをね↓(.)マスタードを[ね: ,
 2 A [はい
 3→O ドイツのマスタードね日本のマスタードみたいに辛くないあんまり.
 (1.3)
 4→A う: :ん
 5 O で (0.6) ちょっとクリーミーなんだね.
 6 O それ(.)びろ: : [って
 7 A [@@@@び(h)ろ(h): : @@@

音源 12 

断片 6 【パニックになった時】

- 1 N だからその：：(0.2)本当にある人をこ：判断する場合環境が↓：
(1.0)あって(.)その環境に↓：(0.6)原因があんのか(0.6)その人自身
に原因があんのか(0.4)見極めんのすごい難しい[よ、
- 2 M [うん：：
- 3 N うむやっぱりだから(0.9)ん誰でもそうでそのもう(0.3)無限に時間
があって無限にお金があったら(.)ゆったりするやん、
- 4 M そうですね、
(0.5)
- 5→N うん(.)だからそのパニックになったときにね↑、
(0.6)
- 6→M はい
- 7 N こ：ぱっとお(0.3)例えば(.)お(0.8)おく奥さんにぱっと覆い被さる
(.)人のパーセンテージなんか調べたらね(0.2)
- 8 N ひよっとしたら(0.5)か[なり＝
- 9 M [あ：
- 10 N ＝日本と中国で差が出んのんちゃうかな思ってたんねんけど(.)[どう
やろ、
- 11 M [はい

この二つの断片において話者 O と N は会話の主導権を持ち、A と M は聞き手である。断片 5 において、O はドイツに行ったことのない A にドイツのマスタードを紹介し、「ドイツのマスタードは日本のマスタードみたいに辛くない」ということを A に説明しようとしていた。それに対して A が遅延した相づちを発した理由は、ドイツのマスタードを食べたことがなく、O の説明だけでその食感がピンとこないからだと推測される

断片 6 も同じく、5N で「パニック」という先行発話の内容とずれた新たな語彙が出てきたので、M の反応がやや遅れたのである。この場合の

遅延した相づちは「不理解」の状況と結び付けられると考えられる。

Chafe (1994) は人間の意識の中にある情報を活性的・半活性的・非活性的の3つの状態に分類している。活性的な状態の情報は、当該の瞬間において話し手の意識の焦点となっている少量の情報である。非活性的な情報は長期的な記憶で、利用可能な大量の情報だが、その時点では焦点化されていない。両者の中間にある半活性的な情報は、さほど焦点化されていないが、非活性的な情報に比べて利用しやすいものであると定義されている。そして発話によって活性的情報に置かれる情報を新情報、発話時点で既に意識の焦点にある情報を旧情報としている。上記の例をみると、「ドイツと日本のマスタードの比較」「パニック」いずれも、それまで言及されていない事物で、聞き手のAとMにとって完全な新情報であり、意識の焦点になるまで時間が必要であったため、相づちが遅延したのではないかと考えられる。

4.2.2 相手発話が一つの見解として完結した部分にある遅延した相づち

この類の相づちは、常に一つの話題がある程度続いてから現れる。以下二つの例（断片7～8、音源13～14）を挙げる。

音源 13 

断片7【造花】

- 1 N 人工的なもので許せるもんって案外少なくてね↑(0.4) 僕ね人工的なもので案外きれいなあ思うのはね↑(1.3) あの商店街にあの(0.8) ン造花の桜があるやんか大売出しなんかのと[きに↓
- 2 S [はいはい]
- 3 N あれきれいなと思う。＝
- 4 S ＝うそ：[: @@@
- 5 N [ほんと(。)あっこまで行けば(0.9) あのピンク(1.5) あれは許せる。

(1.0)

6→S うん

音源 14



断片 8【死にたい】

1 Y だからこ：(0.8)あの死にたいっていうよりも、.h 死にすごい：
(0.6)死というものに、

(0.3)

2 H うん

3 Y トートにかどうかわかんないけど死というものに、.h すごいシン
パシーを感じて、(0.4)寄[ってたんだと思うんです最後は、

4→H [うん

(1.3)

5→H うん

断片 7 の 6S と断片 8 の 4H・5H は 4.2.1 で挙げられた例と異なり、いずれも相手発話の一つの見解として完結した部分に発せられている。断片 7 の N は「造花の桜がきれいだ」と言った後、4S の反応「うそ：：」に対して「あそこまで行けば許せる」と、その理由も含めて述べており、ここで N の発話の一つの見解として完結したと考えられる。その後 6S は 1 秒経った時点でようやく相づちの「うん」を発している。断片 8 の Y は劇の登場人物の心理状態に関して、「最後は死にシンパシーを感じていたので、死に近づいていくのだ」と述べている。3Y は「すごいシンパシーを感じて」という発話で自分自身の見解を打ち上げ、それに対して 4H は 0.5 秒後に相づちの「うん」を発した。その後、Y は「寄ってたんだと思うんです最後は」と自分の発話を完成させ、それに対して 5H は 1.3 秒経った時点でようやく相づちの「うん」を打った。つまりこの断片で H は、相手の見解に対して遅延した相づちを合計 2 回打っている (4H・5H)。これらの場面にある遅延した相づちは「不賛成」の状況と関連性を

持つ可能性が大きいと考えられる。

これは Pomerantz が主張した「非選好的応答が遅れる傾向がある」と関わっていると考えられる。断片 7 の 6S も断片 8 の 4H・5H も、話し手は相手が述べた考えに賛成の立場にはないので、相づち「うん」が打たれる積極的な理由はないと言えよう。しかし、相手の発話に対して何も反応しなかったり、間を置かずに反論したりすれば、その場の雰囲気壊してしまう可能性が大きいので、相づちの「うん」を発したのではないかと推察される。

5. おわりに

本稿では日本語の相づちについて、①相づちの頻度・タイミングと相手発話の速度との関係、②相づちのタイミングと相手発話に対する理解度・態度との関係に関する実験を行い、以下 2 点を明らかにした。

第 1 点。発話の長さが一節でも、複数の節の場合でも、速度が非常に早ければ、相づちは打たれにくい。それに対して、非常に遅い速度の発話は、複数の節で続けば相づちは打たれにくい、一節の場合はそうではない。

第 2 点。相手発話に対する理解度・態度が異なると（「中立」「不理解」「賛成」「不賛成）、相づちのタイミングはそれぞれ異なる。但し、「相手発話に不賛成」という場合だけは、遅れて相づちを発する人もいれば、相手発話が終わる前に非常に早い段階で発する人もいる。ここには大きな個人差が見られた。また、相手発話が終了してから 350ms 以降に発せられる遅延した相づちは主に会話において「新規話題の導入部」と「相手発話の一つの見解として完結した部分」に現れ、それぞれ相手発話に対して「不理解」あるいは「不賛成」に関わると推測できる。

今後は、「相手発話に不賛成」という場合に現れる遅延した相づちとしない相づちをさらに考察し、それぞれの相づちの韻律的特徴を明らかにしたい。

謝辞

Kobe crest flash の利用に関して、Nick Campbell 先生と定延利之先生、さらにインフォーマント諸氏にお礼申し上げます。

実験の発案とツール作成に関して、定延利之先生と田畑安希子様にお世話になりました。お礼申し上げます。

本研究は日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究（A）（課題番号：23242023，研究代表者：定延利之）の成果の一部です。

注

1：実験刺激に用いた発話は「海も別に見えないし、住宅街やし、学生もいっぱい通るしね」である。この発話はネット上で無料公開されている文字・時間情報付きの自然会話音声データベース Kobe Crest Flash (<http://www.speech-data.jp/tabu/kobedata/>) 内に実際に存在する。この発話を日本語母語話者1名（女性）に「早口」「普通」「非常に遅い速度」の三つの速度で自然発話のように明るいい口調で読んでもらった。

2：平均発話速度の算出法は杉藤（1999）にならった。すなわち「ポーズからポーズまでを発話時間としてその時間に何拍（大体仮名文字にして何個）入るか」を速度の単位（〇〇モーラ/s）とし、複数のポーズを含む一文では「全拍数をポーズの時間をのぞいた総発話時間で割ったもの」を「平均発話速度」とした。

3：「8.9 モーラ/s」という速度は少なくとも文頭の数として「早口」と考えられる。文頭の数速度が文中に比べてやや遅いことに関しては後述の阪田・広瀬（1995）を参照されたい。実験において被験者には刺激音声を「発話の始まり」として呈示した。

4：岡登他（1999）の調査によると、日本の会話における相づちの90%以上は相手発話の終了時から-100ms から 300ms の間に発せられる。

5：ただし、本稿では話し手が自分の言い間違いを修復する際における

0.2 秒以下の空白は、ポーズとして扱わないようにする。

文字起こしに用いた記号（7、11 以外は筒井（2012）に参照）

1. [] 複数の参加者の音声的重なる期間
2. = 一つの発話において語と語の途切れが密着している
3. (m. n) 音声途絶えている状態の長さ
4. (.) 0.2 秒以下の短い間合い
5. : : 直前の音声が延ばされている
6. .h 吸気音
7. @@ 笑い
8. . 語尾の音が下がって区切りがついた
9. , 語尾の音が少し下がって弾みが付いている
10. ↑ ↓ 音調の極端な上がり下がり
11. ○○ 人名・固有名詞

参考文献

- Chafe, W. (1994) *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Clancy, P., Thompson, S., Suzuki, R. & Tao, H. (1996) “The conversational use of reactive tokens in English, Japanese and Mandarin”, *Journal of Pragmatics* 26, pp.355–387.
- Endo, T. (2010) “Epistemic stance marker as a disagreement preface: Wo jude ‘I feel/think’ in Mandarin conversation in response to assessments”, 京都大学言語学研究, Vol. 29, pp.43–76.
- Fries, C. (1952) *The Structure of English: An Introduction to the Construction of English Sentences*. Harcourt, Brace: New York.
- 李善雅 (2001) 「議論の場におけるあいづち—日本語母語話者と韓国入学者の相違」『世界の日本語教育』Vol. 11, pp.139–152.

- メイナード泉子（1993）『会話分析』くろしお出版。
- 中里収（2002）「あいづちのタイミングと話し手の発話速度との相関について」『言語・音声理解と対話処理研究会』Vol. 34, pp.57-62.
- 岡登洋平・加藤佳司・山本幹雄・板橋秀一（1999）「韻律情報を用いた相づちの挿入」『情報処理学会論文誌』Vol. 40, No. 2, pp.469-478.
- Pomerantz, A. (1984) “Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes” In J, M, Atkinson & J, Heritage (Eds.), *Structures of Social Action*, pp.57-101, Cambridge: Cambridge University Press.
- 羅希（2014a）「中国人留学生在が日本語に適応する過程の縦断的分析—留学一年間の相づちの使用状況の変化から」『言語と言語教育をめくって』Vol. 7, pp.131-160.
- 羅希（2014b）「会話の雰囲気に影響する相づち：留学生と日本人の会話データの観察より」『電子情報通信学会技術研究報告 = IEICE technical report : 信学技報』Vol. 114, No. 189, pp.19-24.
- 阪田真弓・広瀬啓吉（1995）「対話音声の韻律的特徴の分析と合成」『信学技報 SP95-17』pp.55-62.
- 佐々木泰子（2002）「相談場面におけるあいづちの機能」『日本語学習者と日本語母語話者の談話能力発達過程の研究—文章・音声の母語別比較』平成 13 年度科学研究費補助金研究基盤研究（B）（1）研究成果報告書, pp.24-33.
- 杉藤美代子（1999）「ことばのスピード感とは何か」『言語』Vol. 28, No. 9, pp.30-34.
- 筒井佐代（2012）『雑談の構造分析』くろしお出版
- Yngve, V. (1970) “On getting a word in edgewise”, Papers from the Sixth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society, pp.567-577.
- 楊晶（1997）「中国人学習者の日本語の相づち使用に見られる母語からの影響—形態、頻度、タイミングを中心に」『言語文化と日本語教育』Vol. 13, pp.117-128.